

コロナ禍におけるムスリム移民企業家の リーダーシップと地域のつながり —京都八幡のバングラデシュ系1世の取り組みから—

王 柳 蘭

外国人と地域住民との関係性については、法的、制度的諸問題、不平等性、貧困の格差といった課題が指摘され、いまだ十分な改善に至っていない。本論では、京都府のIRCJ（イスラミック・リサーチ・センター・ジャパン、Islamic Research Center Japan、通称八幡モスク）を創設したひとりのムスリム移民企業家を通して、信仰に根ざしたリーダーシップという視点に着目する。具体的には、来日の経緯と事業経営を始めるまでのプロセス、モスクの創設、パンデミックにおける感染症対策、日本語教室や日本語学校の創設までの取り組みをとりあげ、移民企業家のリーダーシップがイスラームの善行の実践という倫理を素地としつつ、ムスリムコミュニティの生成のみならず、地域におけるつながりを生み出し、社会の課題に協働で解決していくうえで発揮されている点を指摘する。

は じ め に

日本に暮らす外国人住民は年々増加し、1980年代以後、日本は労働力不足を補う形で、技能実習制度・特定技能制度という名目のもと、外国人を働き手として入国するシステムを制度化した。その結果、特別永住者も含むオールドカマーと呼ばれる東アジア出身者等に加えて、ニューカマーが増大した。1989年の出入国管理法改正によって「定住者」という身分を得て来日する日系人（ブラジル人やペルー人）が増加し、同年の「研修」という身分や1993年に発足した技能実習制度の下、労働者として外国人を受け入れる体制ができた（イシ 2020；スエヨシ 2020；永吉 2020）。しかし、この制度がはらむキャリアパスが不明瞭であること、労働者としての権利保護が不十分であること、不適正な送出・受入れ・監理事例等の問題点がさまざまな角度から指摘されてきた¹⁾。新たな政策の目玉となる「外国人の育成就労の適正な実施及び育成就労外国人の保護に関する法律」は、日本が外国人労働者によって「選ばれる国」となるための苦悩の末の打開策であろう²⁾。これまで日本に暮らす彼らを「外国人」というカテゴリー

として囲い込むだけで、生活習慣、文化的宗教的価値観をもつ一人の人間として向き合う姿勢が不十分であった³⁾。しかし、阪神・淡路大震災や東日本大震災を契機として、日本人、外国人を問わず、両者は同じ被災者となり、地域の復興においては協働して連携すること、また、災害時のみならず、平時から地域における人と人との日常的なつながりの重要性が指摘された（吉富 2012）。

本論では、コロナ禍におけるムスリム移民企業家⁴⁾と地域の協働の在り方について、京都府八幡市における IRCJ（イスラミック・リサーチ・センター・ジャパン, Islamic Research Center Japan, 通称八幡モスク）を創設したラムザン・ミルザさんを事例としてとりあげる。八幡市は、中古自動車解体業や部品販売の集積地として知られている。以下では、まずラムザンさんが、バングラデシュから来日する経緯と事業経営を開始するまでのプロセスと時代背景を記述する。そして、日本でモスクを創設するまでの動機と葛藤、コロナ禍における困難とその後の日本語教室や日本語学校の創設のプロセスに着目する。最後に日本人との協働とリーダーシップの発揮という点から、多文化化する日本における外国人の役割と共生について考察を行いたい。

1 多文化社会に向かう日本とムスリム移民－京都府八幡市

1.1 ムスリムの人口増と歴史的背景－南アジア系を中心に

まず、以下では日本におけるムスリムの定着について、人々の出自に留意しながら、その歴史を概括する。日本のムスリムコミュニティの歴史については、小村がそのコミュニティの生成期を5つの時期に区分している。第Ⅰ期は、戦前（1890年）から終戦まで、第Ⅱ期は、終戦後の1945年から1947年ごろまで、第Ⅲ期は、1975年ごろから1980年前半まで、第Ⅳ期は1980年代後半から1990年はじめ（バブル期）まで、Ⅴ期が1990年代後半（バブル崩壊）から現在までである（小村 2015）。

戦前におけるモスクの数は多くない。日本における最古のモスクは、1935年に建てられた神戸モスクである。神戸モスクは神戸港が国際港として横浜に並んで外国人が居留するコミュニティによって繁栄した。その背景には、インドから輸入される綿花、大阪の綿糸や加工品としての綿織物が朝鮮半島、満州、中国等のアジア市場に輸出され、それを支えたインド人ムスリム商人の存在があった。加えて、1917年のロシア革命をきっかけに、政府の弾圧を逃れたタタール人の存在が深く関係している。（坂本 2001；宇高 2018）。

ムスリム移民については、上述のバブル期以後の流入をきっかけに増加した。バブル経済期における人手不足にともなう外国人労働者の日本への大量流入、さらには表向きには移民政策をとらない日本が生み出した、技能実習制度（前身、技術研修生）と密接に関係している（永吉 2020）。当初その出身地は南アジア系（パキスタン、バングラデシュ、イラン）出身者に占められていた。この三国はいずれも、日本とのビザ相互免除国として協定を締結していたからである（山下 2016）。日本とパキスタンとは 1960 年、バングラデシュとは 1973 年に、3 か月間の観光や商用にはビザなしで互いの国に滞在できる取り決めを結んでいた（水上 2018）⁵⁾。

来日したバングラデシュ人の労働者に関する樋口・稲葉らの研究によると、1980 年代後半から 1990 年代にかけて顕著な存在であった日系ブラジル人やイラン人と比較して、バングラデシュ人はあまり注目される集団ではなかった（水上 2020）。先行研究にもとづくと、彼らは出稼ぎや留学の目的で来日し、製造業や建設業、サービス業における単純労働についていた。その際、比較的教育水準が高いこと（高卒以上）、中産階層以上の家庭であること、日本語能力も高い等が指摘されてきた（三宅 1990；樋口・稲葉 2003；稲葉・樋口 2003；北原・大月・志摩 2011）。彼らが日本に来たプッシュ要因としては、1987 年から 1988 年にかけて起こった大洪水に襲われたことや不安定な政治情勢があった（水上 2018）。

現在、日本に定着したムスリムは年々増加しており、1999 年に全国で 15 カ所だったモスクは、2021 年 3 月に 113 カ所に増え、20 年間で倍増したと指摘されている（朝日新聞 2023）。

1.2 京都府の外国人と八幡

本論でとりあげる八幡市は 2024 年 3 月現在、日本人人口は 66,356 人であり、外国人人口は 2,613 人である。総人口に占める外国人の割合は 3.9% である⁶⁾。京都府全体からみると、2023 年 12 月現在において京都府の人口は 2,535,552 人であり⁷⁾、外国人は同年 74,664 人となっている⁸⁾。京都府における外国人の割合が約 2.9% であることからすると、八幡市は外国人住民の数が比較的多い。このうち、2022 年の統計では、八幡市の外国人住民数は 2,555 人となり、もっとも多いのがベトナム人（1,020 人）、ついで中国人（316 人）、韓国又は朝鮮人（242 人）、スリランカ人（129 人）、インドネシア人（103 人）となっている⁹⁾。バングラデシュ人の住民数は統計上、「その他」のカテゴリーに入っているため、詳細は分らない。

八幡は、日本有数の自動車解体業者の集積地であるといわれている。八幡はもともと日本人によって始められた解体業者に加えて、あらたに外国人が業界に参入し、解体された中古車の部品を求めてバイヤーが諸外国から集まることで地場産業が形成されてきた（浅妻 2018）。また歴史的には八幡は、皮革産業から自動車解体業へと移行した地域であり、自動車解体業ならびにそれに関連するくず鉄回収は、その担い手として日本人のみならず、在日コリアンも含まれており、被差別性を内包した地域であった（福田 2014）。

こうした日本人ならびにオールドカマーによる自動車解体業に、のちに台湾やタイ、その後、南アジア系の人々等が参入してきた。たとえば、関東の集積地である立川では1924年に日本人の解体業があらわれ、その後別の地へ移転も繰り返したが、1960年代ごろから外国人バイヤーである台湾人やタイ人との取引が開始した。さらに、1985年以降の急激な円高の影響を受けて、1986年、1987年頃から廃車の数が急上昇し、廃車の処理が間に合わない状況であった。その結果、パキスタン人、バングラデシュ人やスリランカ人といった外国人バイヤーが解体業者に常駐するようになった（浅妻・岡本・外川・福田 2015）。さらに、外国人バイヤーのなかには、1990年代以後の急激な中古部品の国際リユースの進展のあおりをうけ、日本人との付き合いが長くなるにつれ、自ら仕事を覚え自動車解体業を始める人も現れた（浅妻 2018；浅妻・岡本・外川・福田 2015）。こうして誕生した移民企業家のうち、パキスタン人が自動車解体業、中古部品販売業において成功した事例として知られている（福田 2007, 福田 2014, 樋口 2010）。これに対して、バングラデシュ人の移民企業家の実態と日本社会とのつながりについてはあまり知られていない。

2 ムスリムのリーダーシップとその源泉としての喜捨

さて、上述のように日本においてモスクは増加しているが、ムスリムはコミュニティをどのように維持しているのだろうか。コミュニティの維持と組織力という点から、小村は外国人として生きるムスリムの問題点を指摘している。すなわち、モスクの増加という現象は角度を変えれば乱立として捉えることができるという。例えば、ムスリムコミュニティ内部のコミュニケーション不足によってモスクが分裂するといった事例がある。これはムスリムコミュニティとしての組織力の弱さを反映していると、小村は説明している。そのため、ムスリムにおいて指導力を発揮できるほどのカリスマ性をもった

人物や、組織を創り上げて総括できるほどのリーダーシップをもつ者の存在が今後求められると指摘している（小村 2015）。

人類学者の山田はチベット難民社会の研究で得られた知見を通して、移民コミュニティの維持装置として「寄り合いの場」が不可欠であるとし、共有空間の建設にむけて、コミュニティ内部における格闘過程とそこで発揮されるリーダーシップのあり方とその内発性に注目することの重要性を指摘している。とりわけ、山田は移民コミュニティの維持には、集団を導く宗教的倫理にもとづく個のリーダーシップが果たす役割が大きいと述べ、「寄り合いの場」の確保のみならず、「内発的で自発的な利他の精神」に基づくリーダーシップが不可欠であると論じている（山田 2020: 17-18, 117-144）。

本論に関するイスラームのリーダーについては、宗教的知識人としての伝統的なウラマーが指導者の役割を果たしてきたが¹⁰⁾、世俗化が進むなかで、イスラームの覚醒をへた草の根の人々も地域社会において宗教的規範にもとづいて慈善事業を実践する担い手となってきた点は注目に値する。子島は、南アジアを事例に、ムスリムの NGO を筆頭に慈善活動を主導する人の特徴として、「宗教的義務を進んで実践することに加えて、ビジネス感覚をもち、インターネットを日常的に使うミドルクラスに属していること」を挙げている（子島 2014: 6）。この宗教的義務とは、五行とよばれる信仰告白、巡礼、断食、礼拝と喜捨である。この喜捨をめぐる実践は、義務としてのザカートと任意のサダカに分かれる¹¹⁾。ザカートは一年を通じて所有された財産に対し一定率の支払いが課せられるものである。任意に行われるサダカは、金品の施しのほか、他人を助けるための時間や尽力、親切な言葉、病人の見舞い、慰めの行為といった慈善行為も含まれる（森 2002a, 2002b）。こうした利他精神は、ムスリムの社会奉仕活動をけん引していく根源的なエネルギーであるといつてよく、善い行いをすること、他者に善いことをすることは、究極的にはよりよき来世、最後の審判において天国に迎え入れられると信じられている¹²⁾。

もっとも、喜捨を生み出す信仰は、ムスリムを取り巻く宗教的社会的文脈の影響を受けながら形作られるものであり、地域ごとによって実践の違いはある（藤本 2018；西川 2004; Wang-Kanda 2016）。そのうち、モスクの創設は、草の根レベルでのムスリムによる喜捨の実践と深く結びついてきた。例えば、本論に関係する南アジア系ムスリムはその典型である。日本に住むパキスタン系ムスリムは滞日経験が長期化するなかで、ムスリムとしての意識に変化がみられ、イスラーム的規範への回帰が起こっている。とくに、自営業で財を蓄積したムスリム男性のなかには、宗教的意識の覚醒がけん引と

なって、モスクをはじめとした共有空間の創設に貢献する人物がでてきている（工藤 2008: 95-98）。このように、ムスリムは日常の暮らしの中で、喜捨という宗教的実践を通して、インフォーマルな相互扶助をつくりだしてきたのであり、イスラームにおいては、宗教的修行の場合は日常生活と切り離すことはできないのである¹³⁾。

3 八幡にモスクを建てるまで－企業家精神とイスラーム

本節では、1990年代から本格的に日本に定住をはじめたラムザンさんを事例に、来日のプロセス、企業家への軌跡とモスクの創設までをオーラルヒストリーにもとづいて記述する¹⁴⁾。

3.1 来日して事業を経営するまで

3.1.1 来日まで－日本への留学、アメリカンドリーム

ラムザンさんは1965年バングラデシュのダッカ生まれのビジネスマンである。1987年末、日本にあこがれて東京の日本語学校に入学した。もともとダッカの国立大学で統計学を学びたいと思って入学したが、自分の性に合わなかったのですぐに退学し、ビジネスを学ぶために短大に入りなおした。日本に来たのは、1987年、21歳の時で、短大を卒業した直後であった。当時、日本は経済的に豊かであるばかりではなく、日本の製品は世界でナンバーワンを誇る勢いであった。ラムザンさんは「日本はコンピューターや電化製品はもう全世界でばりばりだった」と振り返り、そのような日本に行って、先進的な技術を身に着けたいという夢をもっていた。また当時、外国人にとっては出稼ぎブームであった。その波にのり、ラムザンさんもバングラデシュから日本に行くチャンスをつかみたいと願った。

「出稼ぎ、出稼ぎブーム。日本ではバングラデシュ人はビザは必要なかった。例えば日本人はアメリカに行くときビザ必要ないでしょ。わたしもそんなチャンスがあるかなとおもった。その時すでに、知り合いが日本語学校で勉強していた。一回行ってみようかと思った。それで、半年勉強して。わたしには向かない。なぜかというと、学生たちのほとんど8割は韓国人、いや中国人ばかり。中国人は漢字ばっばとできる。韓国人もできる。うちらはついていけない。それでだめだと思った。ひらがな、カタカナは最初。その時はちょうどよかった。最初の3か月。そこ

から漢字（の勉強が）はいると（中国人は）パンパンできる。うちらは、別のクラスにおちて。それがプライドというか。変なプライド。日本はわたしには向かない。」（ ）は筆者による

その後、ラムザンさんは日本語学校を中退し、1988年にはビザの関係でいったんバングラデシュに帰国した。そのあと、1989年にはつぎの可能性をもとめてアメリカのシアトルに旅立った。小さいときから、パイロットになる夢をもっていて、アメリカに行くにあたっては、出稼ぎではなく勉強するチャンスをつかむため、留学にむけた準備も進めていた。「アメリカンドリーム」だとラムザンさんは言う。

「わたしの友達とかほとんどアメリカとかイギリスとかに行っていた。あたりまえ。IELTS のテスト受けたり。TOEFL。わたしは TOEFL 受けた。わたしはすぐに日本に来た。アメリカに行く準備は時間がかかる。ビザも必要もないので、日本に来た。もともとアメリカに行ってパイロットになりたかった。いつかアメリカ行って、学校に行って。（留学に向けて）やりとりやったことがある。TOEFL 時間かかった。89 年はアメリカに行った。ノースウエストで行った。」（ ）は筆者による

ラムザンさんは飛行機に乗ったとき、パイロットの仕事は肉体労働で、割に合わないと感じた。職業としてあこがれはもっていたが、現実的にはパイロットには向かないと自身で判断した。そこで留学中は一か所に定着するというよりも、バックパッカーのような暮らしをした。ラムザンさんはシアトルにはアルバイトで長く滞在していたようであるが、カナダ、ブラジル、ロンドン等にも出かけ、現地のビジネスを見て回った。その時の経験をラムザンさんはつぎのように語る。

「最初にパイロット、ビジネスやろうかと思って、専門学校か大学に入るため、シアトルに行った。いちおう、そこでカナダ、アメリカ旅行した。半年のビザをもらっていた。シアトルで半年、カナダで3か月。またアメリカで半年。途中でブラジルに行った。語学学校には入っていない。入るつもりだった。シアトルでビジネス、とりあえず、様子を見てから。パイロットあきらめたけど、就職しなくなかった。ビジネスするには、調査や観光したりした。なかなか競争が激しいことが分かった。全世界から集まっていることが分かった。シアトルで日本人が経営している

日本料理店でアルバイトした。そこには、伊藤忠、丸紅の商社の人が食べに来ていた。日本の大手の人が食べに来ていた。ロンドン、ブラジルにも行った。何人かバングラの人がいたのでお世話してもらった。バックパッカーの生活。」

アメリカに滞在している間、ラムザンさんは初めて英語でクルアーンを学び、説教を聞いた。バングラデシュでは小さい時からモスクに通っていたが、イスラームの知識はほとんど身に着いていなかった。しかし、アメリカでは英語を通じてイスラームの教えについて知るチャンスがあった。その経験がいかに自分の生き方に影響したのかについて、ラムザンさんは「留学先のアメリカではクルアーンをよくよんだ。生きていくうえでのガイドラインになった」と語った。

最終的には、1991年にラムザンさんはいったんダッカに帰郷し、アメリカにふたたび戻る。その後1992年、バブル期の日本にビジネスチャンスがあると判断したラムザンさんは、シアトルから直接、日本に戻ってきた経緯についてつぎのように語った。

「92年、その時日本はバブル、アメリカは経済悪い。だからその時比べた。日本は日本語さえ分かれば、いっぱいチャンスが大きい。こちら（アメリカの場合）は世界と競争。こっち（日本）は楽。日本は外国人は来ない。日本は丸紅や伊藤忠の大手がやっていた。あるいは、戦後、神戸とかにインド人がいた。」（ ）は筆者による

このように、ラムザンさんは20代で海外経験を持つことができたことから分かるように、バングラデシュでは恵まれた家庭環境で育った。もともと、ラムザンさんの祖父はイギリスの植民地支配下において、カルカッタ（現コルカタ）の大学を卒業した経歴をもつエリートである。祖父はカルカッタの大学で法律を学んで弁護士をしたが、やりがいを見いだすことができず、国家公務員になったという。その後、インド独立に向けての混乱期、とくにパキスタンの分離独立に向けて1946年8月14日に生じた「直接行動の日」をきっかけに、ムスリムとヒンドゥー教徒の対立が激化すると、祖父はカルカッタの目ぬき通りにあった3階建ての家を手放し、バングラデシュに難を逃れた。家族の命を最優先に守るため、ラムザンさんの父方と母方はそれぞれ半分はインドに残り、半分はバングラデシュに避難した。ラムザンさんの祖父は、その後、女子校の校長になったという。以来、ラムザンさんの一族はバングラデシュに住んでいるが、いまでも、

親戚はインドにもいるという。

3.1.2. 八幡で貿易会社を設立する

ラムザンさんが日本に再入国したのは1992年である。その後すぐに1992年から八幡市に住み始め、1993年に自分で一から貿易会社を設立した。その頃、多くの外国人が労働者として雇われていた時代であったが、ラムザンさんは「誰かに雇われたことは一度もない」と胸を張る。自分ひとりで事業を始めたことについては、「まったく素人から始めたので、最初の1、2年は苦労した」と言う。ラムザンさんは積極的に情報を自分なりに仕入れ、中古自動車とその部品やタイヤ等の日本製品を海外に売った。八幡との接点について、ラムザンさんはつぎのように語った。

「89, 90, 91 年, 92 年にアメリカ。92 年には直接関西に来た。八幡に住んだ。八幡に来たのは、89 年に日本に来たとき、第2の都市、大阪をみてみようと思った。ボランティア関連の仕事をされていた日本人のところ、K さんの家がある枚方に泊めてもらった。その時、(枚方から)新幹線のある京都に向かう帰りに、K さんが八幡を案内してくれた。その時、八幡が車の山であった。自分はダッカにいたとき、家に車があった。この車をバングラデシュに売ったらビジネスになる。そのことが頭に残っていた。なので、シアトルから日本に来るときは、K さんに連絡をとり、K さんの知り合いの Y さんに不動産を紹介してもらった。(住んだのは八幡にある)男山ハイツ。テニスクラブにはいった、95 年に。そこで仲良くなり、友達になり。今もつながっている。」()は筆者による、K, Y さんは仮名

当時の日本ではネット環境はなく、「イエローページに広告を出したら、たくさんの国から商品の受注があった」とラムザンさんという。南アジアの国に加えて、さまざまな国の人たちと取引をした¹⁵⁾。

「ドミニカ人、ロシア人、いろんな国もあった、モンゴル人とか。ドミニカ人もビザなしに日本に来ていた。品物買いに来ていた。ロシア人も来る、南米のチリ、トリニダード・トバコ、オーストラリア人、ニュージーランド人もくる。これらの人たちと取引があった。」¹⁶⁾

さらに2000年には、中古自動車の部品をリサイクルする会社を立ち上げた。とくに中古自動車のエンジンを扱った。解体業者から仕入れたエンジンの2割は国内での販売用、8割はリサイクル用として仕分けし、リサイクルとしてアルミのインゴットを作った。ラムザンさんによると、当時、自動車の解体業の担い手は日本人と在日コリアンが独占していたという。工場の設備費には、8000万かかった。その後、ラムザンさんは自社の工場でリサイクルしたアルミのインゴットを日本のトヨタや三菱自動車会社に販売した。

また、2013年には、経済産業省が2012年に再生可能エネルギーの固定価格買取制度を開始すると、ラムザンさんは新規事業として太陽光発電にも参入した。

このように、会社を創立した1993年以後、中古自動車とその部品の販売から始まって、リサイクル業、さらに太陽光発電事業へとラムザンさんは事業を多角化してきた。「10年間でビジネスは軌道にのった」とラムザンさんは語る。そこには、グローバルな視点でビジネスの競争を捉え、日本におけるビジネスのチャンスと時代の流れを敏感に読みとり、つぎからつぎへと新たにチャレンジしていく企業家精神がみえてくる。

3.2 八幡にモスクを創設

3.2.1 母の死と新たな決意

2017年、ラムザンさんはつぎなる夢に向かった。八幡にモスクを建てたのである。その名前をIRCJ（イスラミック・リサーチ・センター・ジャパン、Islamic Research Center Japan）と名付けた。モスクを建てるまでの約20年間、神戸モスクに通っていた。とくに阪神・淡路大震災の時は移動に困難を極めたという。当時についてラムザンさんはつぎのように語った（王 2021: 7）。

「日本に来て30年くらい、日本にいる間、毎週金曜日にモスクにいきます。このモスク（神戸モスク）は1935年にできあがり、90年くらいたちました。毎週、通っていました。その間に阪神・淡路大震災がありました。行くのに5時間、帰るのに5時間という時期もありました。」

このようにラムザンさんは来日してから、礼拝のために八幡から神戸にほぼ毎週通っていたが、しだいに仕事場とモスクが遠いことに負担を感じはじめていた。しかし、日々の仕事に追われて、モスクを設立するには至っていなかった。ついに2017年、ラ

ムザンさんは母の死をきっかけに、一大決心することになった。

「2017年、わたしの母親が亡くなって。2月に亡くなりました。その年の8月にここをモスクとして、礼拝場所として始めました。もともとモスクにするつもりだったのです。このビルは。その予定でこのビル買っていたんです。なかなかいろいろバタバタして始めていなかったんです。それが2017年2月に母親亡くなったら、わたしちょっと、すごい、実家がなくなったんです。わかります？お父さんはその20年前に亡くなりました。2017年、それなくなって、わたし行く場所がない、実家がなくなった。もちろん、おじさんいるけど。それでちょっとわたしいろいろ。人間は生まれたら必ず死ぬって決まっているじゃないですか。お父さん、親も全部なくなって、今度は自分の時代じゃないですか。だから、それでちょっと、落ち着いて、これ始める。とにかく始まらないとどうしようもない。その年のラマダーンの8月に（モスクの運営が）始まった。」（ ）は筆者による

以上のように、両親を亡くしたことで、ラムザンさんは現役世代として、ビジネスのみならず、ムスリムとして社会に貢献できることを考え始めた。また、長年日本に暮らしていたが、自らの行く末も必然的に考えるきっかけとなった。ラムザンさんは、「日本は死ぬ場所」としてその頃から意識するようになったとも語っている。

3.2.2 モスクの運営をめぐる

モスクには礼拝を導くイマームが必要となる。モスクを創設したときのイマームは、2017年から約1年半の間、インドネシアから夫婦で来日していた男性が担当した。その男性の妻は博士号をもっており、日本に留学していた。イマームである夫はインドネシアのマドラサで勉強した経験をもっていた。そこでラムザンさんはその夫にお願いし、金曜日だけボランティアでイマームになってもらった。現在のイマームは、バングラデシュからよんできた。彼はバングラデシュにあるラムザンさんの中古車販売のショールームで働いていた従業員であった。彼はマドラサで学んだ経験をもっていた。そこでラムザンさんは彼の宗教知識をみこんで、2018年からモスクのイマームとして招聘している。モスクでの礼拝はアラビア語であるが、説教にはアラビア語に加えて、ウルドゥー語での通訳をこのイマームが担当している。ウルドゥー語で通訳をしているのは、モスクに礼拝に来ているのがインド、パキスタン、バングラデシュの人が多いから

である。金曜日の礼拝には多くて70～80人が参加するが、そのうち6～7割の人はウルドゥーが分かる人たちである。そのほか、インドネシア人やウズベキスタン人もいる。

このようにラムザンさんは、イマームを自身のネットワークを使って招へいた。もっとも、ラムザンさんは、アラビア語とウルドゥー語のどちらも聞き取れない。なぜ、自身の母語であるベンガル語で通訳しないのかという筆者の質問に対して、南アジアのムスリムにとってウルドゥー語は身近な言語であるので、礼拝で使用する言語としてはふさわしいと、ラムザンさんは言う。かりにベンガル語で礼拝をおこなってしまうと、バングラデシュ人のみしか聞き取れず、他のムスリムを排除しかねないからだと言っている。

4 地域コミュニティのなかのモスク

4.1 注目されるモスク

さて、こうして設立されたモスクは京都府で注目をあびた。2019年5月14日付の京都新聞には、「念願のモスク 八幡に イスラム教徒、市内に多く 礼拝にぎわう」として以下の記事が掲載された。

イスラム教の礼拝所「モスク」が八幡市に開設された。市内には多くのムスリム（イスラム教徒）が暮らしており、毎週金曜日は集団礼拝に訪れる人たちでにぎわい、貴重な交流の場になっている。モスクの名前は「イスラミックリサーチセンタージャパン」。自動車関連貿易業や太陽光発電パネル会社を営むバングラデシュ出身のミルザ・ラムザンさん（53）がおとし、所有する市内の4階建てビル内に開設した。ラムザンさんは来日して30年を超えるが、「来日当時はモスクがほとんどなかった。毎週、神戸のモスクに通っていた」といい、モスク開設は念願だった。訪れているムスリムは、八幡市や京都市、大阪府の約70人。金曜の集団礼拝は、イマーム（指導者）が聖典コーランを読み上げる中、サウジアラビアのメッカの方角を向き、正座して両手と額を床につけて祈る。礼拝後は別室で、豚肉や酒を使わないイスラム教の戒律に従った「ハラル」料理を楽しむ。バングラデシュ出身のサイフル・イスラムさん（41）＝大阪府枚方市＝は「今までは家でお祈りするしかなく、困っていた。助かっています」と流ちょうな日本語で語り、ほほえんだ。宗教法人化が目標で、布教だけでなく、イスラム教を通じて平和の探求を目指す

いう。ラムザンさんは、近隣の在住者だけでなく、関西に観光で訪れたムスリムの「受け皿にもなれば」としている。

また、2019年11月28日付の毎日新聞では「イスラム圏から留学生、労働者増加 増えるモスク、共存課題 36都道府県に105か所」と題して、掲載された。

「アラーは偉大なり」。京都府八幡市郊外のビル4階にある「イスラミックリサーチ センタージャパン」で、毎週金曜昼すぎ、祈りの声が響く。近隣で働くイスラム圏出身の約50～100人が集まる。近くで貿易業を営むラムザン・ミルザさん（53）が10年前にビルを購入し、2年前からモスクとして開放する。30年前にバングラデシュから来日。付近は中古車関連の会社が多く、次第にイスラム圏の外国人労働者が集まるように。「会社経営が落ち着き、地域のイスラム教徒のために役立ちたいと考えた」。バングラデシュ出身で在日6年の中古車関連会社勤務、ムハンマド・アリさん（37）は「帰国できるのは年1回。妻や小さい子どもと離れて寂しいけれど、家から近いここに来れば落ち着く」と話す。シリア出身で中古車関連会社で働くカリド・スルタンさん（30）は母国が内戦状態となり、7年前に弟（25）と日本へ。家族や親族の大半は隣国トルコで暮らす。「悲しいけれど、今は国に帰れない。でも、ここで友人に会えれば、問題ないよ」と笑顔を見せた。このモスクができる以前は、近隣のイスラム教徒は電車を乗り継ぎ2時間近くかけて神戸モスク（神戸市中央区）まで出かけていた。ラムザンさんはモスクを宗教法人化し、日本の大学教員と連携し、イスラムの研究所も作る計画だ。

この記事から、八幡市の産業構造を反映して、中古車関連会社に勤務する同業者の存在が間接的に示されている。また、同郷のバングラデシュ人のみならず、内戦を逃れたシリア人等、イスラム圏の労働者をも包摂したモスクとしてスタートしたことが分かる。モスクが創設されることで、異なる業種や出自のムスリム同士があらたな関わりあいを持つ機会がさらに生まれたのである。一人のムスリムリーダによる共有空間の創設という社会的営為が周囲の人々の社会関係資本の蓄積にも影響を与える事例ともいえる。

4.2 非ムスリムの存在—日本人行政書士と二人三脚で歩む

異国でモスクを創設するうえで必要なのは、同郷の人々や宗教を通じた関係性だけではない。宗教施設の諸手続き、日本人を含む地域住民との関係性の構築と対応の仕方など、外国人にとっては見えない制度の壁と心の壁が立ちちはだかる。こうした壁を乗り越えていくうえで日本人の役割は重要である。ラムザンさんのモスク設立の夢にむけて、専門的知識を生かしつつサポートしてきたのが、行政書士の久保田征鑑さんである¹⁷⁾。久保田さんによれば、モスクが誕生した2017年の翌年にあたる2018年の春に、ラムザンさんから直接電話での問い合わせがあったことから縁ができたという。「全国的にみて宗教法人に特化した行政書士は少ないので、自分に連絡があったのではないかと久保田さんは当時を振り返る。また、事務所を開業した2年目のところで、仕事はまだ少なかったと言う。

「最初この依頼があったときは、怖かった。テロや海外の自爆テロのことなども聞いていたので、怖い宗教だと思った。宗教法人化したいというラムザンさんの思いにはびっくりしたが、断ってられないと思った。偏見もあったが、自分の仕事を軌道に乗せるために、仕事は選ばず依頼を受けた。それまでの人生のなかでイスラームとの出会いはなかった。開業では、寺院を対象にした案件を事業として想定していた。いまでも9割が寺院関係者です。」

久保田さんが開業当初に想定していた顧客の中心層は仏教徒であった。したがって、出会ったこともないムスリムからの宗教法人化の依頼を、仕事のためといった消極的な理由から最初は受け入れていた。しかし、ラムザンさんと連絡を取り合う中で相性がいい、その後は、モスクの運営に関する行政手続き、公的機関とのやりとりといった業務に加えて、地域のNPOや大学等、日本人との交渉や交流、相談について、二人三脚となってラムザンさんをサポートしてきた。とくに法人化にあたっては、①活動実績、②信者数、③役員体制（責任役員会、評議員会）など、認証に向けて情報を整理し、宗教法人規則を作るなど尽力した。さらに、こうした業務にくわえ、モスクのFacebookを担当し、日本語で積極的に発信している。また、SNSのみならず、足しげくモスクに通って対面でラムザンさんへの助言や外部との交渉を担ってきた久保田さんは、「ラムザンさんの人間性に惹かれ、イスラームへの偏見は今ではもうない」と言う。

2021年6月には、IRCJは念願の宗教法人化を果たした。このように、行政書士とい

う専門領域にとどまらず、イスラームに向き合い、ラムザンさんの仕事をサポートしてきた久保田さんは、日本社会と外国人住民の橋渡しとしての役割を果たしてきた。

5 コロナ禍の試練

5.1 コロナ禍とモスク

本節では、ラムザンさんのモスクにおけるリーダーシップのあり方をコロナ禍における実践を通して考えていく。

モスクでは、パンデミックに対してどのような対応がとられたのであろうか。国内で陽性者が初めて確認された2020年1月から同年末の12月までの間に調査をおこなった小谷・田村・子島によると、感染がしだいに拡大する同年2月以後から、モスクでの集団礼拝の禁止や、地域によっては緊急事態宣言期間（4月7日から5月25日）までの間にモスクを閉鎖した場所もあった。また、ソーシャルディスタンスの実施、感染予防のための消毒、予防啓発のためのポスターやチラシの配布等が行われた¹⁸⁾。

IRCJにおける諸実践については、本書の執筆者を中心におこなった2021年6月開催の同志社大学における公開講演会の記録集において記されている。ここでは、筆者とのインタビューのやりとりの一部を示すことでモスクがどのような問題に向き合い、ラムザンさんが何について葛藤していたのかについて紹介したい（王 2021: 7-16）。

王 コロナ禍でどんな影響があったか、ラムザンさんが困ったことは？

ラムザン 一番困ったのはインド人とかバングラデシュの人たちが、去年のコロナ禍で（故郷にもどってから日本に）帰れなかったことです。今年のラマダーン（断食月）で3人帰っていますが、日本に帰ってこれないので仕事で困っています。モスクの工事も止まっています。

王 モスクを支える人たちが母国に帰ってモスクの運営に影響が出ていると。

ラムザン そうです。工事が止まっています。

王 「マスクをつけてください」とか礼拝にくる人たちに伝える時、どんな伝え方をされていますか？

ラムザン 入り口のところに紙を貼っています。「マスクをつけて入ってください」と。何人か、無視して入る。その場合はドアでチェックして1枚ずつマスクを渡していました。現在は入り口に一人いて体温を計ってマスクの確認をします。消毒もしないと入れ

ない。

王 一列に並んで礼拝されますが、距離のとり方も、ですか？

ラムザン うちは広いから男性はだいたい250人礼拝できる。女性は50人。ワンフロアで300人。そのうち男性が50人だったら社会的距離は十分とれています。

王 食事はモスクで人々の交流の場となり、宗教的な意味もありますが、それがなくなった点はどうですか？

ラムザン 今年のはじめはコロナの感染がひどくなってきて。日本でも。だから、食事は中止しました。というのも、食事ではマスクを外すじゃないですか。それがよくないと思って、危ないと思って。ここ（礼拝所）では社会的距離とマスクできちんと守れます。食事のところはなかなか難しい。緊急事態で日本政府は飲食店に厳しくしている。なので、うちも中止したのです。

（略）

ラムザン 行政からも支援を受けています。例えば、コロナの特別定額寄附金の受け方がわからなかったので八幡市の職員がきてくれました。またコロナ禍の前から警察もきてくれています。日本ではあまりありませんが、宗教施設に対して近所の人たちが反対することがよくあります。警察はモスクと地域の共生を見守ってくれています。

以上は短いインタビューではあるが、ラムザンさんの筆者への応答からつぎのようなことがわかる。①他地域のモスクと同様¹⁹⁾、感染リスクの高い食事は中止し、2020年4月下旬に行ったラマダーン（断食月）や断食明けの祭りにおける共食は中止した。②礼

写真1 コロナ禍におけるソーシャルディスタンス



拝施設でのマスクの着用を求めた。また、インタビューには反映されていないが、消毒、検温等の対応を徹底した。③礼拝時は通常、信徒は肩と肩が触れ合うほど密接に整列するが、コロナ禍においてはソーシャルディスタンスの確保に注力した。このようにモスクでは感染予防対策の徹底に努めたが、ラムザンさんによると、異なる民族的背景をもつ人々が礼拝にくるため、言語や文化環境の違いを越えて規律を守ることは難しかったという。もっとも、手洗いの励行といった衛生環境という点においては、ムスリムはそもそも礼拝前にウドゥー²⁰⁾を行っているため、身体はいつもモスクの礼拝時には清潔に保たれているので、とくに問題にはなっていなかった。

さて、感染症対策以上にコロナの影響でラムザンさんが困難だと考えたことがある。それはモスクの改修工事についてである。ラムザンさんはもともと商業ビルを購入して、モスクとして使っていた。コロナ前から少しずつモスク用に改修を進めていた。しかし、緊急事態宣言をきっかけに、工事を手伝っていたバングラデシュ人たちが祖国へ帰郷した後、日本に戻れなくなってしまった。そのためモスクは人手不足になり、思うように工事が進まなくなったのである。緊急事態宣言が発せられたのが2020年4月から5月にかけてであるが、同年の7月には、IRCJのFacebookにつきのような記録がある。

Facebook（2020年7月31日）

ご報告

当モスクでは予てより更なる礼拝者増を見込み、多くの信者様のご協力を得て3階フロアの改装工事を進めて参りましたが、本日のイドを持ちまして皆様にご利用いただけるようになりました。

*4階はイマムの部屋となり関係者以外の立ち入りは出来ません。ウドゥーは男性は2階の食堂奥、女性は3階の女性用礼拝堂の隣となっております

8月一杯は3階の入り口は一つとなっておりますが、9月には女性専用の階段通路を整備して男女お互いに顔を合わせずそれぞれに礼拝堂に入ることが可能となる見込みです

また、2階の食堂について引き続き改装工事を進めて参りますのでご理解の程お願いいたします

IRCJのFacebook（2020年12月6日）にはつぎのように記されている。

当モスクの出入り口ですが改修工事を進めております

礼拝にお越しになる皆様にはご不便をおかけすることもあるかと思いますが、より皆さんに親しみ、利用いただきやすい環境を作り（ママ）を進めるためにご理解の程お願い致します

これらの工事で構想されていた具体的な内容は、たとえばつぎのようである。3階はもともとイマームの部屋であったが、改修して男性用の礼拝室にする。2階の食堂をこれまでは信徒が儀礼のとき、あるいは来客があった場合に接待する場として利用されていたが、今後は改修してハラルレストランとする。モスクには男女別々の入り口をもうけて、女性専用の階段を作る。2020年の時点では、男女が礼拝堂に至る導線が明確に区別されていなかったのである。男女を区別した礼拝を実践する上では、商業用の建物をそのまま宗教施設として使用するの是不都合だったからである。

では、感染症のリスク対策を含めて細心の注意が求められるコロナ禍にあって、なぜラムザンさんはモスクの工事を続けたのだろうか。そこには、ラムザンさんの外国人労働者に対する心遣いがあった。すなわち、コロナ禍によって、ラムザンさんの会社の従業員の仕事が減ってしまい、生計の維持が難しくなったのである。そこでラムザンさんは従業員のために臨時の働き口を提供するため、モスクの工事手伝いとして雇用したのである。

また、こうした工事スタッフの問題に加えて、コロナ禍においてラムザンさんが頭を抱えたのは、料理を担当するスタッフが2020年のラマダーンの期間中に退職し、そのまま帰国してしまったことである。一般的にモスクにおいては、共食の交わりを通して、ムスリム同胞間の交流の機会が大事にされてきた。共食は、ラマダーン、断食明けの祭りや犠牲祭などの集合的な儀礼において典型的にみられる。IRCJにおいても、コロナ禍以前においては、ラマダーン期間中には、共食が実施されていた。しかし、コロナの影響で共食は中止した。料理人の不在という問題は現在にいたって解決していない。その結果、ラムザンさんは、コロナ禍をきっかけに、モスクでの共食はすべて中止したままとまっている。

5.2 小結—外国人コミュニティにおけるモスクの脆弱性

以上のように、IRCJでは、パンデミックにおいてつぎのような脆弱性がみいだされた。ひとつは、労働者の雇用の不安定性とモスク運営の維持という点である。IRCJに

集う外国人労働者たちのなかには、景気悪化の影響を受けやすく、労働環境が不安定な人々が含まれていたことである。新型コロナウイルスによる雇用情勢の悪化については、日本に住む外国人のなかでも、とりわけ、非正規で働く労働環境が不安定な外国人に大きな打撃になっていることが指摘されていた。例えば、中部地方では製造業に従事する外国人労働者が、自動車部品関連工場が休業になったことにより、職を失い、生活費の工面に苦勞したといわれる²¹⁾。IRCJにおいてもこうした問題を抱える信徒がいた。ラムザンさんのモスク改修の動きの背後には、苦難に直面した外国人労働者の雇用を確保するためという別の目的があったことはすでに述べた。八幡市内に居住する外国人は、地域の産業である自動車解体工場に従事している人が多い。こうした工場での労働者を信徒にもつモスクの運営を恒常的に維持していくうえでは、信徒の生活環境の安定性もある程度は考慮にいれる必要がある。外国人労働者が集うモスクとしての社会的役割が今後も求められるであろう。

脆弱性という点からさらに指摘できることは、外国人コミュニティに内在する流動性である。すでに冒頭で述べたように、IRCJには約70名の礼拝人口がおり、その多くは外国にルーツをもつ人々である。その中には、ラムザンさんのように永住権を持っている人もいれば、不安定な雇用条件のなかで、就労ビザを更新しながら生活している人も多数含まれる。また、留学ビザを取得して日本の大学等で勉強している留学生もいる。このように、日本社会において必ずしも生活条件が制度的に保障されているとは限らない信徒も含まれるモスクであるため、母国への帰国や他国への移動といった信徒の流動性は避けられない。パンデミックにおいてモスクの重要な宗教行事を担う料理人が母国に帰国したまま、音信不通なってしまったケースは、モスク運営にかかわる恒常的なスタッフを確保することの難しさを端的に示している。また、コロナ禍とは直接関係がないが、IRCJではイマームが一時的に不在であった時期もあったという。こうした信徒の流動性が引き起こす事象は、IRCJに限らず、移民が多数をしめるモスクが直面している課題であろう。外国人信徒の流動性を考慮にいれたモスク運営の持続可能性のありかたをつきつけているといえよう。

一方、コロナ禍において、ラムザンさんのリーダーシップのみならず、行政からのサポートを得ることができたことも、困難を乗り越えていくうえで重要な要因であったといえる。コロナ禍における特別定額寄附金の受給には八幡市の職員のサポートがあった。経済的にも困窮していた外国人住民にとっては、生存に直結した不可欠な情報であり、モスクが行政と外国人住民をつなぐ重要なハブとなったことを示している。

6 開かれた場として－日本語教室から日本語学校への挑戦

ラムザンさんの八幡市における活動において特筆すべきは、地域社会におけるモスクの役割を宗教共同体のみに閉じた形ではなく、コロナ禍をきっかけに地域社会との協働に向けて活動をあらたに開始した点にある。モスクは2020年6月に日本語教室として開かれた。それについて2023年10月には、ラムザンさんは日本における外国人労働者の課題を見据えて、日本語学校を創設した。以下ではコロナ禍における日本語教室の営みを通して、八幡に根づきはじめたモスクが地域の課題に日本人と協働で向き合っていくプロセスを記述していく。

6.1 日本語支援者との出会い

ラムザンさんがモスクで日本語教室をはじめるきっかけを与え、のちに日本語教育にも携わるうえで影響を与えたのは、京都府内における外国人に向けた日本語支援団体の人々である。IRCJが創設されてから、モスクには、京都府内のみならず、大阪や奈良からも足を運ぶ信徒が増え、八幡市周辺の市町村にはムスリムの住民も増えている。こうした動向は日本語支援をしている人々の関心をよび、その結果、イスラームへの関心が高まりモスクを訪問する非ムスリムが増えてきた。

外国人の子どもたちの日本語支援に関わる堀江亜希子さんもそのうちの一人である²²⁾。堀江さんは社会学を専攻し、フランスに1年間留学した経験をもつ。外国人支援の分野に関わりだしたのは、2010年頃からである。堀江さんは府内の現役教員等が立ち上げた外国人の子どもを支援する会と出会い、それ以後、その会が主催するイベントや研修会に参加するようになっていった。そうした学びの過程で、堀江さんは外国にルーツをもつ中学生の子どもたちが、進路の情報を得ることに苦労していること、その原因の一つとして日本語能力が足かせとなっていること、保護者にも進路情報が適切に伝わっていないことなど、さまざまな課題が教育現場で山積みであることに気づいた。

堀江さんは学校と外国人の保護者と子ども、教育委員会等、複数のアクターと協働してきた。そうした活動が続けるなかで、堀江さんは京都府で外国にルーツをもつ子どもたちの支援の必要性が高い地域の一つとして、外国人住民の割合が高い八幡市に着目していた。その課題解決に向けてあらたに地域住民との協働が必要だと認識を強め、その可能性を模索していた。

その後、堀江さんは2019年6月、はじめてIRCJを訪問した。そのきっかけはこの年の5月に京都新聞にIRCJの記事が掲載され、八幡市に新しいモスクが設立されたことを知ったからである。この記事は、外国人住民への支援を行う市民の関心をよんだ。堀江さんはさっそく職場の同僚、城陽市国際交流協会のスタッフ、日本語教室・世界はテマンのボランティアと一緒にIRCJを訪問した。ラムザンさんとそこで初めて出会い、2階の食堂でハラール料理を囲んで歓談のひと時をもった。

6.2 日本語教室のはじまり

その後コロナ禍になった。堀江さんは一時的にラムザンさんとの連絡は途絶えていたが、その間、八幡市に住むパキスタン人の高校生に向けて、日本語学習支援を行っていた。京都府内の大学生と一緒にオンラインや京都市内の施設を使いながらのボランティアである。しかし、この活動は八幡市から京都市まで電車で片道約1時間を要する高校生には負担になっていた。そこで堀江さんは八幡市内で利用できる別の施設を探していたが、活動にとって都合の良い施設を見つけることがなかなかできなかった。そこで2020年5月に、面識のあるラムザンさんに連絡をとり、外国人の子どもたちの日本語教室としてモスクの一室を提供してほしいと頼んだ。

ラムザンさんは、堀江さんを通して外国人の子どもたちが抱える問題と窮状を知り、無償でモスクを提供することに合意した。ラムザンさんは、外国人の家族とその子どもについて、「一人ここで就労ビザをもらったら、家族を連れてくるじゃないですか。でもその家族は日本語が話せないのです。学校でも困っている。小学生なり、中学生なり。だからそういう人たちに何かやらないといけない」と語る。とくに、イスラーム圏出身の家族とともに来日した家族には日本語の学習に困難を抱えるケースが多いことを、ラムザンさんは八幡でビジネスをはじめてから身近に見てきた。

こうして外国にルーツをもつ子どもに向けて、二人は協力しはじめた。第1回の日本語教室は2020年6月にモスクで行われた。当時の状況について、堀江さんは「水曜日の夜に使わせてもらっていました。モスクは工事をしているときだったけれども、私たちが勉強するときは、資材を移動させスペースを空けてくださっていました」と語る。

この活動は2020年10月2日付の京都新聞に「モスクで日本語教室開講」の見出しで紹介された。日本語教室の名前は「イージー ランゲージ ジャパニーズ」である。この名前は、パキスタン人高校生と、堀江さんと活動と一緒に立ち上げ学習支援をしていた大学生が名付けてくれたという。当時の記事の一部をみると、「日本語教室は毎週水

曜日の午後7時半からで、バングラデシュやインド出身の高校生から40代までの4人が学ぶ」と記されている。「6年前にパキスタンから来日した高校2年生のラフマン・ウラさん²³⁾ (17) = 同市八幡 = は、『日本語の読み書きは難しいが、一対一で丁寧に教えてもらっている。もっと勉強して将来の仕事に役立てたい』と話した」と書かれている。2020年の6月から翌年の春ごろまで、モスクは日本語教室として使われた。

6.3 日本語学校の設立へ

6.3.1 設立のきっかけ

コロナ禍はラムザンさんの活動範囲をさらに広げた。ラムザンさんはその後、あらたにモスクの敷地内に日本語学校「アジア国際日本語学校 (Asian International Japanese Language School)」を設立した。すべての日本語学校は法務省出入国在留管理庁の管轄下にあるが、この日本語学校は2023年8月に告示を受け、2023年10月に正式に法務省告示校として開校した²⁴⁾。

「なぜ、モスクに日本語学校を設立したのですか」といった筆者の質問に対して、「イスラームの教えでは貧しい人を助けることになっています」、「困っている人がいたら助けること」、とラムザンさんは答えた。宗教法人が日本語学校を経営するのは珍しい。こうした筆者の疑問については、「これはビジネスではない。ただ働きです」と自分のビジネスとは切り離し、外国人労働者が日本に置かれている現状とその制度に対する不満を別の形で解決していきたい、その糸口の一つが日本語学校である、と説明する。のちに明らかになったのであるが、ラムザンさんはバングラデシュのダッカにおいても孤児院向けの施設を自らの私財を投じて創設し、いまは財団として管理運営している。国境を越えた慈善活動の経験が日本にも生かされたのである。

また、上述した堀江さんがボランティアで行った日本語教室には、後からラムザンさんの従業員も数名参加することになった。日本に暮らす外国人の大人や若者がぶつかる言葉の壁とそれに向きあう支援者の姿をラムザンさんはこれをきっかけに目の当たりにした。さらに、ラムザンさんはコロナ禍で見たニュースについてつぎのように語った。「ニュースを見たら、日本はいま大変なことになっていた。労働者は70歳で定年になる。現場では人手不足が深刻である。介護施設などでは人が足りなくなっている」。さらに「自分の会社に10年前に中国からの技能実習生を5人雇ったが、仲介業者に高額な手数料をとられた。いずれも3年ほどで帰国してしまった。技能実習の制度では、ピンハネされる。技術を身に着けても、この制度では外国人は借金をして暮らし、日本に

居続けることもできない」とラムザンさんは言う。こうした外国人労働者の問題を解消するうえで、日本語学校を設立することは、人手不足の日本の経済とキャリアパスの構築をめざす外国人の若者にとって Win-Win 関係にあると、ラムザンさんは説明する。

6.3.2 日本語学校の理念

筆者がモスクを訪れた 2023 年 9 月 15 日、IRCJ では日本語学校の開校の準備が着々と進められていた。ラムザンさん自身は、日本語学校での留学経験はあるが、日本語教師の資格はもっていない。そこでラムザンさんは 2021 年の年末に求人を出して日本語学校の運営能力のある人材を募集した。関東方面で日本語学校の教務主任をやっていた経験のある松本裕典さんを含めて 5 人の教職員でスタートした。

「日本語が話せる人材を育て、地域社会に貢献する」を教育理念として、日本語学校の教育目標は公式 HP につぎのように書かれている²⁵⁾。

1. 大学・専門学校等への進学に足る高度な日本語運用能力を持った人材を養成する。
2. 自律性を育み個々のキャリア形成や自己実現が果たせるよう支援する。
3. 社会の一員として参加・活躍できるよう地域社会との交流・連帯の機会を創出する。

2023 年 10 月に入学する留学生は 41 名である。男女比は女性 24 名、男性 17 名である。松本先生によると応募者数はその倍以上の 100 名ぐらいであったというから、初年度から順調なスタートを切った。また、通常入学した学生は進学、就職、帰国の 3 つの選択肢があるが、教育理念にあるように、ラムザンさんの日本語学校では、9 割の学生は進学を目指している。というのも、日本の制度では、専門学校を含め、短大や大学を卒業すると日本で就労ビザが取れるからである。「専門学校の留学生向けのビジネスコースは日本人向けとは別に留学生入試を実施しているため、介護やホテル、コンピューターや自動車関連の理系分野に外国人として技術を身に付けて、留学生には日本でキャリアを開拓してほしい」と、ラムザンさんは願っている。

10 月入学者は 1 年半後の 2025 年 3 月に卒業する。2024 年 4 月の入学に向けて 20 名の学生の入学者を募集することになっていた。4 月入学者は 2 年間在籍して、2026 年 3 月に卒業となる。このうち、2023 年度の 10 月入学者はバングラデシュ人とネパール人

が中心という。4月入学者もネパール出身者が多く、そのほかにはパキスタンやウズベキスタンの学生からも入学の問い合わせがあった。学生の年齢は18歳から28, 29歳の幅で、学歴は出身国の高卒以上となっている。日本語能力試験のレベルはN5相当以上を合格基準として定めている。こうした入学の手続き、法務省や文部科学省とのやりとり、学生への対応など、開校に向けた諸準備は松本先生が行ってきた。このように日本語教師であるエキスパートを右腕とし、ラムザンさんは自身のネットワークを使って、母国からの留学者を呼び込んでいるという。バングラデシュやネパールにある日本語学校に、自身の知り合いを通して視察してもらうことで、現地の情報を事前に入手し、ビジネスのネットワークを生かし手堅く応募者を集めることができた。ラムザンさんは、コロナ禍のピンチをチャンスに変えて、モスクが日本語学校の機能を持つという革新的な挑戦に取り組んでいる²⁶⁾。

おわりに 多文化共生に向けての備えと外国人住民のリーダーシップ

本論では、八幡市に定住したバングラデシュ出身のムスリム企業家の利他精神と地域社会との関わり、そこで発揮されるリーダーシップの様相を来日までの経緯、モスクの創設、コロナ禍における対応、日本語教室から日本語学校の設立のプロセスを通して記述してきた。

ラムザンさんは八幡に移り住んだのち、地域での主要ビジネスである自動車解体業と部品販売を主とする貿易会社を創業し、多角的に事業を展開してきた。他方、イスラームが求める宗教的倫理である喜捨を軸に、利他精神を発揮し、外国人労働者や家族が抱える問題にも向きあうべく、モスクの開設に向けて奮闘してきた。

リーダーシップという観点からいえば、山田のいうところの「内発的で自発的な利他の精神」に基づく個のリーダーシップをラムザンさんは発揮したといえよう。すなわち、自己や民族集団のための生活戦略のみならず、イスラームがもつめる宗教的倫理に促され、ムスリムたちが集う「寄り合いの場」としてのモスクを創設した。その特徴は、子島や工藤が述べたように、宗教的知識人ではなく、世俗の教育を受け、ビジネスで財を築いた人が個人の意思とイスラームの覚醒をへて、慈善活動を行っている点にある。ラムザンさんは学歴ならびに経済的にも当時のバングラデシュにおいて中流階層にあり、出稼ぎ目的で日本に出国した労働者とは異なり、海外留学に資する人的資本と海外において相互扶助を可能にする社会関係資本をもちあわせていた。また、アメリカ滞

在中に、クルアーンにもとづく生活に目覚める。ラムザンさんの言葉でいえば、宗教が生きる上での「ガイドライン」となったのである。

また、本事例でとりあげた日本語教室と日本語学校の設立という社会活動は、モスクの持つ機能が宗教活動に限定されず、地域における多様なアクターが参画できる「寄り合いの場」として機能しはじめたことを示している。外国にルーツをもつ子どもへの日本語支援は、モスクの運営とは本来機能的には結びつかないものであった。しかし、ラムザンさんは、コロナ禍においても、日本人との交渉とつながりを持ち、外国にルーツをもつ子どもと日本語の問題に向き合い、外国人労働者が映し出す日本社会の矛盾を克服すべく、日本語教室からさらに日本語学校というあらたな一步を展開した。

このように新たな事業をコロナ禍において行うという点においては、信仰に根ざした社会活動という側面に加えて、企業家としてのリーダーシップと経験が影響している。全世界を巻き込んだパンデミックは、感染症という身体的影響のみならず、不確実性の高さに加えて、人々の移動の自粛と制限、経済活動への多大なる影響という点で、自然災害とは異なった危機であった。危機に対する認知や姿勢、さらにどのように対応するかが企業活動のレジリエンスを左右するのだとすれば、ラムザンさんはコロナ禍というピンチをまさにチャンスに変えたのであった。モスクと日本語教室、日本語学校とを結びつける新たな発想と実践である。また、外国人住民の困りごとや相談ごとを抱えた人びとが孤立する傾向が強まったと指摘されるコロナ禍にあって、ラムザンさんはリーダーシップを多方面に向けて発揮し、地域社会における行政を含めた日本人との協働を通してパンデミックの課題に果敢に向き合ってきた。それは非常時において普段以上に不安になっているムスリム住民にとっては、精神的・身体的な支えになった。加えて、ラムザンさんはコロナ禍で仕事を失った従業員のことを自分事として心配し、モスクの改修の仕事を与えるという対応をとった。この実践は利他精神とも不可分であり、経済合理性のみでは説明できるものではない。

以上のように、本事例は一人のムスリム企業家による信仰に根ざしたリーダーシップを通して、モスクが「寄り合いの場」としてムスリムのみならず、ムスリム以外の地域住民に対して開かれ、社会活動を行う場として地域社会の中で機能してきたことを示している。また本事例は、日本におけるムスリム人口が増えるなか、ムスリム同士の組織力の弱さや、地域住民との摩擦など課題が指摘される一方で、外国人住民の主体性に立脚した多文化社会のあるべき姿を映し出している。

このように、本研究を通して、行政や日本人自治会が主導する上からの外国人住民と

のつながりの構築ではなく、相互に利他精神で支えあうコミュニティづくりを平時から実践していくことで、災害時にも対応できるレジリエントな社会を築きあげることの可能性を示すことができた。とりわけ、日常のなかで培われてきたイスラームの倫理観が危機に対応する中で発揮されるというリーダーシップを通して等身大に外国人住民の主体性をとらえていく視座がみえる。こうした研究事例の蓄積をとおして、外国人住民が生み出す「寄り合いの場」が多様な社会的役割を担った地域のハブとして今後いかに展開していくのか、またその利他精神と宗教的实践が日常と非日常の双方においていかなる影響を人々に与えるのか、他地域の比較を通して検証していくことが求められる。

謝辞

本調査はラムザン・ミルザさん、久保田征鑑さん、堀江亜希子さん、松本裕典さんによるご協力によって可能となった。モスクや日本語学校の現場に足を運ばせていただき、度重なる訪問とインタビューを実施させていただき、ここに感謝申し上げます。

注

- 1) 川村編 (2008)；奥田・田嶋編 (1991)；宮島・藤巻・石原・鈴木編 (2019)；吉原編 (2013)。
- 2) 厚生労働省 (2024)「改正法の概要 (育成就労制度の創設等)」
- 3) 奥田・田嶋編 (1991)。
- 4) 本論では、起業家ではなく、シュンペーター (2020) の企業家としての「新結合 (イノベーション)」に着目している。
- 5) その後、パキスタンとバングラデシュとの協定は 1989 年に廃止された (水上 2018)。
- 6) 八幡市 (2024)「八幡市人口集計表」(令和 6 年度 3 月現在)
- 7) 京都府 (2023)「京都府推計人口」
- 8) 京都府 (2023)「京都府外国人住民数」
- 9) 京都府 (2022)「外国人住民国籍別人員調査表」
- 10) 小杉編 (2010: 65-67)。
- 11) 例えば、クルアーン 2 章: 262 には、「アッラーの道のために、自分の財産を施し、その後かれらの施した相手に負担屈辱の念を起こさせず、また損なわない者、これらの者に対する報奨は、主の御許にある」と書かれている。クルアーンの訳は三田 (1982) に基づく。
- 12) 中村 (1977) を参照。
- 13) イスラームの人間観、宗教観については塩尻 (2008) が参考になる。
- 14) ラムザンさんとの出会いは、同志社大学プロジェクト科目 (2019 年度) である。その後、筆者は 2021 年 6 月の同志社大学における公開講演会でラムザンさんを発表者とし

てお願いした。コロナ禍が収まった2023年9月15日、11月10日に筆者はモスクを再度訪問した。ラムザンさんのオーラルヒストリーに関するインタビューは2023年12月29日、2024年5月3日、2024年6月28日に集中して実施した。オーラルヒストリーの手法としては、大門（2017）が参考になる。

- 15) 例えば、2001年から2017年の中古車輸出上位には、一位のロシアを筆頭に、アラブ首長国連邦、ニュージーランド、チリ、ミャンマー、南アフリカ共和国、ケニア、パキスタン、フィリピン、スリランカ、モンゴルが挙げられている。（浅妻 2018）。この国際販売網には、1960年代以後に移民企業家が参入しはじめた（浅妻・岡本・外川・福田 2015）。
- 16) フィジー人も取引相手であったとラムザンさんは付け加えた（2024年6月28日）。
- 17) 久保田さんとのインタビューは2023年9月30日に行った。
- 18) 小谷・田村・子島（2021）を参照。
- 19) 同上。
- 20) 礼拝を遂行する前に義務づけられている、水を用いた身体の清め。片倉他編（2002）。
- 21) 2022年6月5日付日本経済新聞記事を参照。外国人とコロナ禍については高橋（2023: 34-51）を参照。
- 22) 堀江さんへのインタビューは2023年11月1日に実施した。
- 23) 新聞に掲載された名前を引用しているが、正しい表記はラハマン・ウラさんである。
- 24) 本節のインタビューは主に、2023年11月10日、12月29日に実施した。
- 25) アジア国際日本語学校のHPにて、公開されている。<https://www.aij/school.com/ja/about-us>（2024年4月25日閲覧）
- 26) 中小企業のコロナ禍への対応については関編著・同志社大学中小企業マネジメント研究センター編（2022）を参照。危機への認知、姿勢や対応と企業活動のレジリエンスについて論じている。

参考文献

- 浅妻裕・岡本勝規・外川健一・福田友子（2015）「自動車解体業の歴史にみる移民企業家の役割について（座談会）」『北海学園大学経済論集』63(1)：41-60。
- 浅妻裕（2018）「第2章 自動車国際リユースと立地変容」小島道一編『中古品の国際貿易調査研究報告書』13-29頁。
- 福田友子（2007）「トランスナショナルな企業家たち——パキスタン人の中古車輸出入」樋口直人・稲葉奈々子・丹野清人・福田友子・岡井宏文（2007）『国境を越える——滞日ムスリム移民の社会学』青弓社、145-177頁。
- 福田友子（2014）「国際リユースとエスニック・ビジネス——中古車・中古部品貿易業における南アジア系移民企業家」『国際リユースと発展途上国——越境する中古品取引』アジア経済研究所、134-171頁。
- 藤本透子（2018）「第4章 イスラーム社会における喜捨——中央アジアのカザフスタンを

- 中心に」伊東利勝編『功德と喜捨と贖罪——宗教の政治経済学』愛知大学人文科学研究
所, 203-245 頁。
- 樋口直人・稲葉奈々子 (2003) 「滞日バングラデシュ人労働者・出稼ぎの帰結——帰還移民
50 人への聞き取りを通じて」『茨城大学地域総合研究所年報』36: 43-66。
- 樋口直人 (2010) 「在日外国人のエスニック・ビジネス——国籍別比較の試み」『アジア太平
洋レビュー』7: 2-16。
- 稲葉奈々子・樋口直人 (2003) 「滞日バングラデシュ人の職業経歴——帰還移民 50 人への聞
き取りを通じて」『茨城大学人文学部紀要 コミュニケーション学科論集』14: 89-106。
- イシ, アンジェロ (2020) 「2-1 ブラジル人——デカセギ時代の起源と終焉時間, 空間, 階
層をめぐる模索」駒井洋監修・小林真生編著『移民・ディアスポラ研究 9 変容する移
民コミュニティ——時間・空間・階層』明石書店, 54-65 頁。
- 片倉もとこ他編 (2002) 『イスラーム世界事典』東京: 明石書店。
- 川村千鶴子編著 (2008) 『「移民国家日本」と多文化共生論——多文化都市・新宿の深層』明
石書店。
- 北原玲子・大月敏雄・志摩憲寿 (2011) 「バングラデシュから日本への出稼ぎ労働者の出身
地における生活状況と住宅様式に関する研究——国際労働力移動による連鎖移民が送り
出し国の居住環境に及ぼす影響」『日本建築学会計画系論文集』692: 1761-1770。
- 小村明子 (2015) 『日本とイスラームが出会うとき——その歴史と可能性』現代書館。
- 小杉泰編 (2010) 「第 2 章 イスラームの再構築」『宗教の世界史 12 イスラームの歴史 2
イスラームの拡大と変容』山川出版社, 37-67 頁。
- 小谷仁務・田村まり・子島進 (2021) 「コロナ禍における日本のモスク——感染症対策と支
援活動」『第 63 回土木計画学研究発表会・講演集』1-14。 [https://repository.kulib.kyotou.
ac.jp/dspace/bitstream/2433/267196/1/proc_ip_63_1195.pdf](https://repository.kulib.kyotou.ac.jp/dspace/bitstream/2433/267196/1/proc_ip_63_1195.pdf) (2023 年 11 月 30 日閲覧)
- 工藤正子 (2008) 『越境の人類学——在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出
版会。
- 三田了一 (訳・注解) (1982) 『聖クルアーン——日亜対訳・注釈』改訂版, 日本ムスリム協
会。
- 三宅博之 (1990) 「アジアから日本への出稼ぎ労働者の実態——バングラデシュ出身者の場
合」『アジア経済』31(9): 27-49。
- 宮島喬・藤巻秀樹・石原進・鈴木江理子編 (2019) 『別冊環 24 開かれた移民社会へ』藤
原書店。
- 水上徹男 (2018) 「バングラデシュ出身者の出入国の動向とコミュニティの形成」吉成勝
男・水上徹男編『移民政策と多文化コミュニティへの道のり——APFS の外国人住民支
援活動の軌跡』現代人文社, 130-139 頁。
- 水上徹男 (2020) 「2-9 バングラデシュ人——新しい層の流入と第 2 世代以降の定着」駒井
洋監修・小林真生編著『移民・ディアスポラ研究 9 変容する移民コミュニティ——時
間・空間・階層』明石書房, 98-100 頁。

- 森伸生 (2000a) 「ザカート」 大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 395-396 頁。
- 森伸生 (2000b) 「サダカ」 大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 398-399 頁。
- 永吉希久子 (2020) 『移民と日本社会——データで読み解く実態と将来像』中央公論新社。
- 中村廣治郎 (1977) 『イスラーム——思想と歴史』東京大学出版会。
- 西川麦子 (2004) 「平等原理の現在——バングラデシュ農村における喜捨の慣行と物乞い」『絆——共同性を問い直す』(岩波講座宗教 第6巻) 岩波書店, 161-183 頁。
- 子島進 (2014) 『イスラームを知る 21 ムスリム NGO——信仰と社会奉仕活動』山川出版社。
- 王柳蘭 (2021) 「外国人コミュニティと災い——コロナ禍の八幡モスク」同志社大学人文科学研究所編『多文化な日常における防災——「いつも」と「もしも」をつなぐ』(人文研ブックレット No.71), 第99回公開講演会, 同志社大学人文科学研究所, 7-16 頁。
- 奥田道大・田嶋淳子編著 (1991) 『池袋のアジア系外国人——社会学的実態報告』めこん。
- 大門正克 (2017) 『語る歴史, 聞く歴史——オーラル・ヒストリーの現場から』岩波新書。
- 坂本勉 (2001) 「東京モスク沿革誌」『アジア遊学 特集 イスラームとの出会い』(30) 勉誠社, 121-128 頁。
- 塩尻和子 (2008) 『イスラームの人間観・世界観——宗教思想の深淵へ』筑波大学出版会。
- 関智宏編著・同志社大学中小企業マネジメント研究センター編 (2022) 『新型コロナウイルス感染症と中小企業』同友館。
- スエヨシ, アナ (2020) 「2-2 ベルー人——日本社会におけるベルー人コミュニティの30年間」駒井洋監修・小林真生編著『移民・ディアスポラ研究9 変容する移民コミュニティ——時間・空間・階層』明石書店, 66-67 頁。
- シュンペーター, J. A. (2020) 『経済発展の理論 (初版)』八木紀一郎, 荒木詳二 (訳), 日本経済新聞出版本部。
- 高橋典史 (2023) 「コロナ禍の日本における宗教を基盤とする移民支援の展開」『現代宗教2023』1: 34-51。
- 宇高雄志 (2018) 『神戸モスク——建物と街と人』東方出版。
- Wang-Kanda, Liulan (2016) "Bottom-up Coexistence: The Negotiation of Chinese Ethnicity, Islam, and the Making of Ethno-religious Landscapes among Yunnanese Muslims in the Thai-Myanmar Borderland", in Takako Yamada and Toko Fujimoto eds., *Migration and the Remaking of Ethnic/ Micro-Regional Connectedness, Senri Ethnological Studies* 93: 49-64.
- 山田孝子 (2020) 「第4章 リーダーシップとコミュニティの維持——トロント・チベット人社会における『寄り合いの場』建設の事例から」本村真 [編] 『辺境コミュニティの維持——島嶼, 農村, 高地のコミュニティを支える「つながり」』ボーダーインク, 117-144 頁。
- 山下清海 (2016) 「増加・多様化する在留外国人——「ポスト中国」の新段階の変化に着目して」『地理空間』9(3): 249-265。
- 吉原和男 (2013) 『現代における人の国際移動——アジアの中の日本』慶應義塾大学出版局。

吉富志津代（2012）「市民意識と多文化共生」駒井洋監修・鈴木江理子編著『移民・ディアスポラ研究 2 東日本大震災と外国人移住者たち』明石書店，198-208 頁。

行政資料

厚生労働省（2024）「改正法の概要（育成就労制度の創設等）」<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/001231483.pdf>（2024 年 5 月 8 日閲覧）

京都府（2022）「外国人住民国籍別人員調査表」<https://www.pref.kyoto.jp/kokusai/documents/kokusekibetsu.pdf>（2024 年 4 月 25 日閲覧）

京都府（2023）「京都府推計人口」<https://www.pref.kyoto.jp/tokei/monthly/suikeijinkou/suikei2023.html>（2024 年 5 月 1 日閲覧）

京都府（2023）「京都府外国人住民数」<https://www.pref.kyoto.jp/kokusai/documents/juminsuii.pdf>（令和 5 年現在（2024 年 4 月 25 日閲覧）

八幡市（2024）「八幡市人口集計表」（令和 6 年度 3 月現在）<https://www.city.yawata.kyoto.jp/0000000247.html>（2024 年 4 月 25 日閲覧）

新聞

朝日新聞，2023 年 5 月 6 日，「『日本人のイスラム教徒』が増える理由——国内のモスクは 20 年で 7 倍」<https://www.asahi.com/articles/ASR4X5215R2GPTIL002.html>（2024 年 4 月 25 日閲覧）

京都新聞，2019 年 5 月 14 日，「念願のモスク 八幡に イスラム教徒，市内に多く 礼拝にぎわう」

京都新聞，2020 年 10 月 2 日，「モスクで日本語教室開講」

毎日新聞，2019 年 11 月 28 日，「追跡：イスラム圏から留学生，労働者増加 増えるモスク，共存課題 36 都道府県に 105 カ所」<https://global.factiva.com/hp/printsavews.aspx?ppstype=Article&pp=Save&hc=Publication>（2023 年 12 月 6 日閲覧）

日本経済新聞，2022 年 6 月 5 日，「コロナで失業外国人，職探し難しく困窮 支援の動きも」<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO59997790U0A600C2CN8000/>（2023 年 12 月 6 日閲覧）

（第 21 期第 17 研究会による成果）